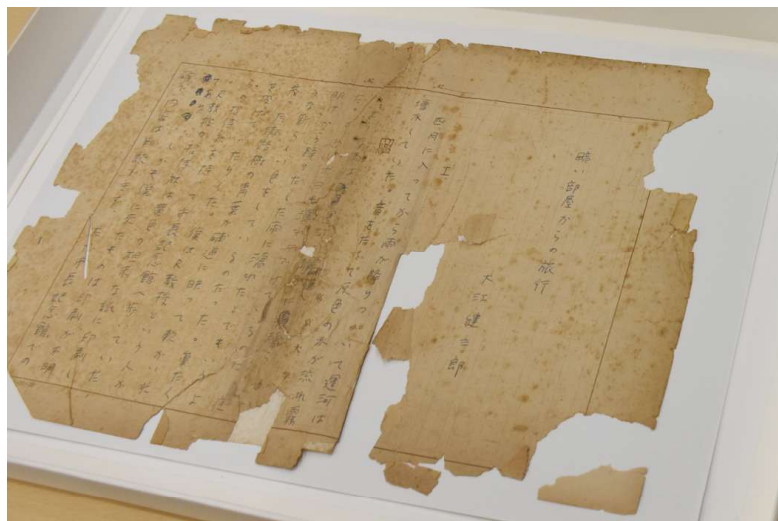


下宿先の女性主人が保管

## 大江健三郎さん 未発表2作品見つかる、在学中に執筆

ノーベル文学賞受賞作家・大江健三郎さんが東京大学在学中に執筆したとされる未発表の小説2作品(自筆原稿)がこのほど見つかった。東京大学が3月2日に会見を開き、発表した。2作ともこれまで存在が知られていなかった小説で、同大は「大江文学の初期作品を理解する上で貴重な資料」だとしている。2023年3月に亡くなった大江さんは、1954年に東京大学に入学した。在学中の



『暗い部屋からの旅行』の自筆原稿(東京大学文学部大江健三郎文庫 ©大江健三郎著作権継承者)

1957年に『死者の奢り』で文芸誌デビューを果たして以降、時代を先取りした作品を次々と発表。1994年には日本人で2人目となるノーベル文学賞を受賞した。

今回見つかった2作品のタイトルは『暗い部屋からの旅行』『旅への試み』。『暗い』は架空の町を舞台に、周囲から類人猿扱いされている大学教授や、政治団体に追われる女性らが登場し、ある秘密を知ったために命を狙われることとなった「僕」と女性が汽車に乗って町を出るといったストーリー。原稿末尾に「一九五五・五・十九」と記載があり、東大文学部教授らによると、大江さんの現存する小説としては最も古い作品だという。



東大文学部教授ら語る「奇跡的な発見」

一方、『旅へ』は三人称でつづられる短編で、原稿末尾には「一九五七・五」とあった。今回見つかった自筆原稿は、当時、大江さんが住んでいた下宿先の女性主人が保管していた。女性の孫から東大に連絡があり、東京大学「大江健三郎文庫」に寄託された。なお、両作品は3月6日刊行の文芸誌『群像』に掲載されている。